聖なるものに触れる

キリスト教ゆかりのヨーロッパは、観光の旅も巡礼の旅もほとんど同じ所を訪れる。二つの旅の違いはどこにあるのだろう。

「歴史的遺産を見る」と「聖なるものに触れる」の違いではないかと私は思う。

〈聖なるもの〉

神は目に見えない存在である。目に見えるものと見えないものの接点、それが聖なるもの、聖域とでも言うべきものと思う。巡礼者は、そこで目に見えない神を感じるのだ。

〈ヤコブの大聖堂〉

スペインで最も美しい広場と言われるオブラドイロ広場に面して聖ヤコブの眠るサンティアゴ大聖堂がある。

栄光の門と呼ばれる入り口の中央に大きな柱がある。柱の上部には「父と子と聖霊」が天使たちにかしづかれている彫刻がある。聖なる柱なのだ。

巡礼者は大聖堂にたどり着くと必ずこの聖なる柱に触れる。

ちょうど手のひらと五本の指が入るほどのくぼみになっており、大理石のその部分は、もう黒光りしている。

ローマのバチカン大聖堂でも、入り口の聖ペトロの像の左足に触れる。聖なるものの象徴が、巡礼者をより聖なるものへと近づけてくれるのだ。

サンティアゴ大聖堂の中央祭壇の後ろに聖ヤコブの像がある。彼の遺がいは像の真下の地下室に安置されているという。つまり像は遺がいの代わりの聖なるものなのである。

祭壇右横の細い階段を昇る。頂上部分は広くなって、左側に二つの穴がある。そこはちょうどヤコブの像の真後ろで、二つの穴に両手を入れ、聖ヤコブを後ろから抱き抱えるように触れるのだ。

〈触れること〉

人間の五感（視・聴・嗅・味・触）の中で「触れる」は、自分以外のものと最初に接触する感覚である。

ヘレン・ケラーは見えず、聞こえず、話せずの中で、水に触れたことをきっかけに言葉を知る。

触れるという感覚は大切なのだ。

イエス・キリストは病人を癒された時、病人に触れられたことが福音書の中に何回も出てくる。

触れられた結果、目が見えるようになったり、歩けなかった人が歩けるようになるという奇跡が起こった。この奇跡が強調されがちだが、イエスの目的は奇跡を行うことではなかったと思う。

イエスは良くなった人に対し「あなたの信仰が、あなたを救った」と言われる。

つまり、大切なのは奇跡という結果ではなく「イエスに触れられたら必ず良くなるという確信、その信仰こそが大切なのだ」と言われたのではないか。

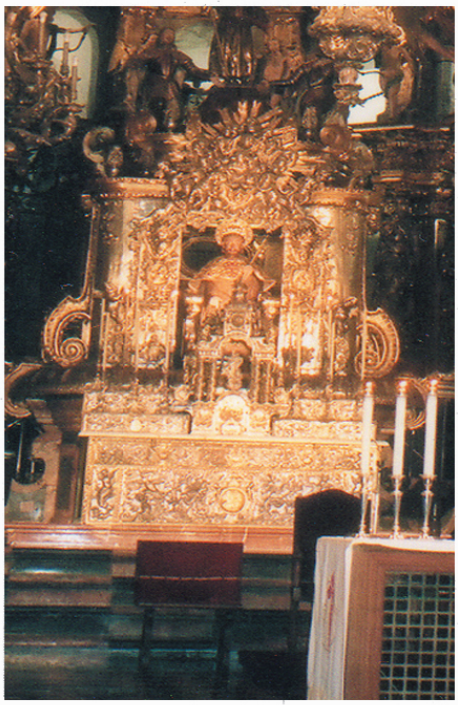
今の世の中、何ごとも合理主義が価値観の中心にあり、聖なるもの、目に見えない神への信仰は軽んじられている。

初期キリスト教会最大の思想家、聖アウグスティヌスは『人間には神など必要ない』と言うのなら、人間は理性のない動物と変わらない」と言った。

今の世の中、動物ならすることのない「自分の子どもへの虐待、子どものいじめ、夫婦間や親子間の殺人」など数多い。

聖なるものとの関係こそが、人間を人間らしくするのではないだろうか。

（元山口放送取締役ラジオ局長）


右手前が中央祭壇、後ろが聖ヤコブ像

妻も巡礼者、聖なる柱に触れる